

〈資料〉

サッカーのルール改正後におけるゴールキーパーのプレー
 ～2000年競技規則改訂より～

末永 尚*・久保田洋一*・吉村 雅文*・古賀 初**・長谷川 望***
 大嶽 真人****・石崎 聡之*****・小坪 昭仁*****・竹内 久善*****

A Study on the Play of Goalkeepers after the revision of Soccer Rules
 ～the revision soccer rules in 2000～

Takashi SUENAGA*, Youichi KUBOTA*, Masafumi YOSHIMURA,
 Hajime KOGA**, Nozomu HASEGAWA***, Masato OTAKE****, Satoshi ISHIZAKI*****,
 Akihito KOAKUTSU***** and Hisayoshi TAKEUCHI*****

Abstract

The purpose of this study was to contribute goalkeeper coaching methods in the future by analyzing the tendencies of goalkeeper's activities after the revision soccer rules.

The analysis of games was carried out in terms of 31 games from the Euro2000 in the Belgium and the Netherlands.

We carefully looked at the ball possession time, the frequency of passes by kicks and throws with success and failure of from catches the ball to pass the ball.

The following are the results of this study.

1. The frequencies of pass by kicks and throws were almost same. Particularly it was observed that there were intensions to build up attacks by using throw.
2. Almost all goalkeepers carried out passes consciously within 6 seconds. Furthermore, as for such ball possession times, throw was significantly shorter than kick statistically.

From these results, in the coaching of goalkeepers in the future, goalkeepers were expected to improve quick decision-making ability to pass the ball to where, to whom, and what kind.

* サッカー研究室
 Seminar of Soccer
 ** 東京電機大学
 Tokyo Denki University
 *** スポーツ心理学研究室 (非常勤)
 Seminar of Sports Psychology
 **** 慶應義塾大学
 Keio University
 ***** 小山工業高等専門学校
 Oyama national college of technology
 ***** 江戸川学園取手高等学校
 Edogawa Gakuen Toride High school
 ***** 東京経済大学 (非常勤)
 Tokyo Keizai University

〔I〕 緒 論

近年、サッカーのルール改正が行なわれ、特に、ゴールキーパー (以下、GK と記す) の手によるボール保持に関する改正がされている。これら GK に関するルール改正の内容に共通してみられることは、GK がボールを手で保持することによる時間の浪費を少なくし、守備から攻撃へ切り替わる局面をよりスピーディーな展開にしていることとする意図がみられる。

これまでのルール改正の変遷を遡ってみると

1991年以前まではGKがボールをいったん手から離れた後はペナルティエリア外にいる味方選手がボールに触れた後でなければGKはボールを手で触れてはならない⁴⁾、という制限と、ボールを保持しながら4ステップ以上歩いてはならないという制限がされていた。しかし、実際はペナルティエリア外の味方選手とのパス交換が多くみられ、効果的な解決策とは言えなかった。

1992年に味方選手からの足でのバックパスを、GKは手で扱うことができない⁵⁾、という改正がなされた。この改正により、味方選手の足によるパスとGKの手でのパス交換の繰り返しができなくなったことで、GKもフィールドプレーヤーと同様な、足でボールを扱う技術を向上させることが求められるようになった¹⁾¹⁰⁾

1999年にはGKがボールを手または腕で5~6秒以上保持したときは、時間の浪費の違反を犯したとみなされる⁶⁾という文面が追加され、これまで味方選手とのパス交換の繰り返し禁止とボールを保持してからの歩数による制限に、新たに時間的制限が加えられた。

2000年には、ゴールキーパーがペナルティエリア内でボールを手から離すまでに、ボールを手でコントロールしている間に6秒を超えた場合、相手チームに間接フリーキックを与える。しかし、ゴールキーパーは6秒間にペナルティエリア内であればボールを持ってどこに移動してもよい⁷⁾という改正がされ、GKの手によるボール保持について時間による制限のみとなり、歩数による制限が条文からなくなった。

このようにGKの手によるボール保持に関するルール改正が繰り返されたことで、ゴールキーパーに求められるプレーがますます多様化してきていると言ってよい。サッカー競技は、攻撃と守備が一瞬にして切り替わるチームゲームである。相手チームのボールになった瞬間に守備が始まり、味方ボールになった瞬間に攻撃が始まる¹³⁾。守備の最終者であるGKからのパスは、攻撃の起点でもあるので非常に重要である²⁾。特にGKがボールをキャッチし、守備から攻撃へと切り替わる局面において、キックあるいはスローイング

によって効果的な攻撃を行なうことができれば、チームの勝利に少なからず影響を与えらる⁸⁾。

ルール改正やルール適応の基準変化は、スポーツの技術的、戦術的要素に重要な影響を与えらる。その変化の流れを事前に予測して、いち早く対応することは、強化を進める上で重要な要因といえる。

本研究では、2000年ルール改正以後のサッカーのゲームにおいて、GKがボールを手で保持してからのプレーに関するゲーム分析を行ない、得られた知見から今後GKに求められるプレー、またGK育成における指導法の一助とすることを目的とした。

〔Ⅱ〕研究方法

1. 調査対象

2000年のルール改正内容を最初に適用した国際大会となった、ベルギー、オランダ2ヶ国共催による2000年ヨーロッパ選手権大会(EURO2000)より全31試合を分析対象試合とした。

2. 分析項目

VTRに収録された試合から、ゴールキーパーがボールを手で保持してからパスするまでのプレーの軌跡を、30分の1に縮小した自作の記録用紙に記録した。さらに、ボールを手で保持してから離すまでの時間をストップウォッチで計測した。また、パスをキックで行なった場合とスローイングで行なった場合に分けて記録し、そのパスが成功した場合と失敗した場合とに分けて記録した。なお、パスの成功、失敗は、パスが味方選手に繋がったものを成功とし、相手選手に奪われたものを失敗とした。

〔Ⅲ〕結果

1. パスの頻度

GKがボールを手で保持してからパスした頻度をキック、スローイング、分けて図1に示した。ゲーム中にGKがパスした頻度は合計で470回あり、そのうちキックが246回、スローイングが224

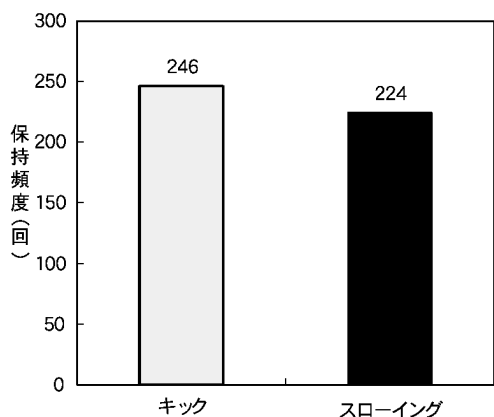


図1 ボールをパスした頻度

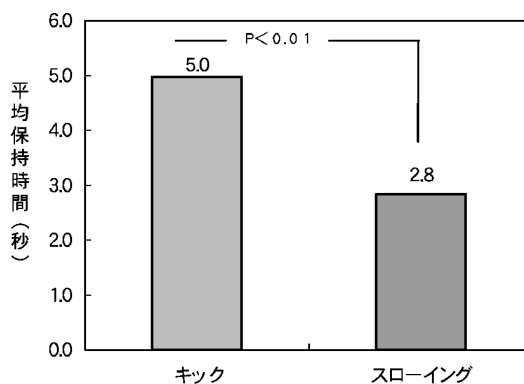


図3 手で保持してからパスまでの平均保持時間

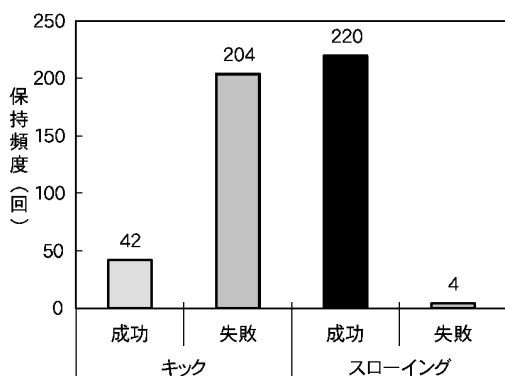


図2 成功および失敗別からみたパスの頻度

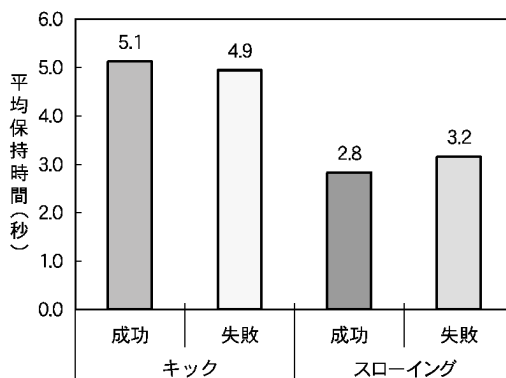


図4 成功および失敗別からみたパスまでの平均保持時間

回とはほぼ同頻度であった。また、キック、スローイングそれぞれを成功、失敗別に分けて図2に示した。キックによるパスでは、成功が42回、失敗が204回であった。スローイングによるパスでは、成功が220回、失敗が4回であった。

2. パスまでの保持時間

GKがボールを手で保持してからパスするまでのボール保持時間の平均値を図3に示した。キックとスローイングを合わせた合計の平均時間は 4.0 ± 2.5 秒であった。そして、キック、スローイングそれぞれ分けてみると、キックは 5.0 ± 2.5 秒、スローイングは 2.8 ± 2.0 秒という結果であ

た。両群のt検定による差の検定を行なったところ、1%水準で有意な差がみられた。つまり、スローイングはキックより明らかに早くパスしていたことが示された。

キック、スローイングそれぞれを成功、失敗別に分けて図4に示した。キックによるボール保持時間は成功が 5.1 ± 2.5 秒、失敗が 4.9 ± 2.5 秒であった。スローイングによるボール保持時間は成功が 2.8 ± 2.0 秒、失敗が 3.2 ± 1.0 秒であり、それぞれ間に有意な差はみられなかった。

3. 1秒毎のパスの頻度

GKがボールを手で保持してからパスするまで

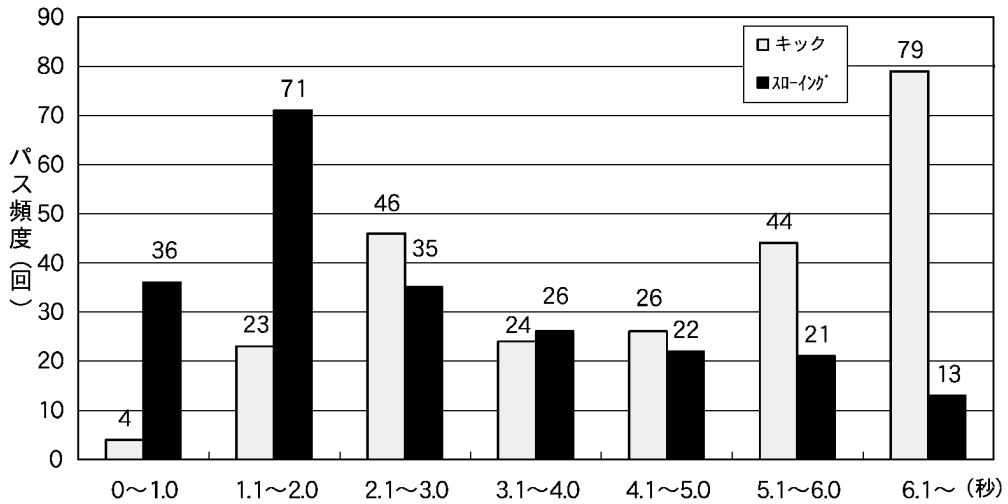


図5 1秒毎におけるパスの頻度

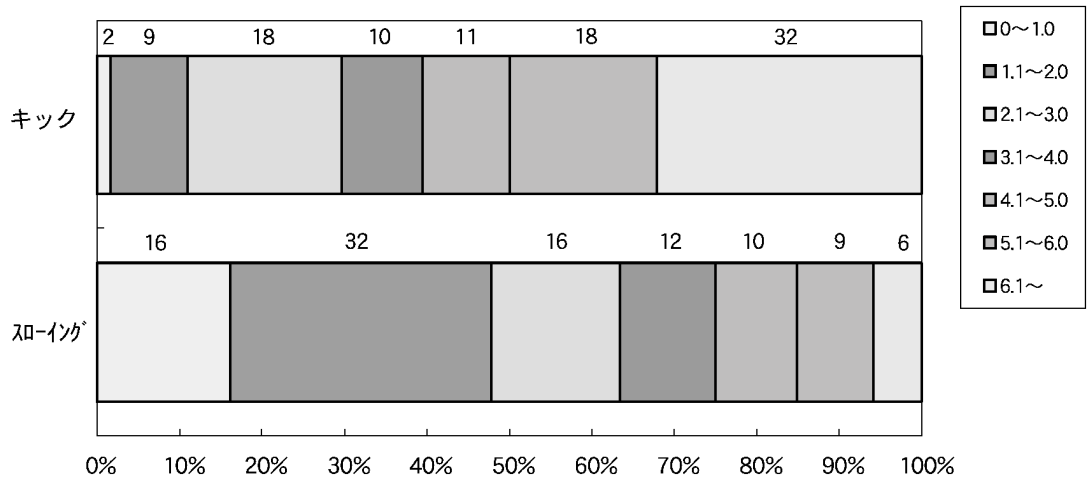


図6 1秒毎のパスした頻度の割合

の頻度を1秒間隔に区切って表したものを図5に、割合で表したものを図6に示した。その結果、キックは2.1~3.0秒のところが多く、全体の18%ものパスが行なわれ、その後少なくなるが、再び1秒ごとに頻度は増えていき、6.1秒以上のパスがキックによる全パスの32%を占める一番多い頻度を示した。またスローイングは、1.1秒~2.0秒のところスローイングによる全パスの

32%を占める一番多い頻度を示し、その後は時間の増加につれて減少傾向を示した。

〔Ⅳ〕考 察

2000年のルール改正からGKの手でのボール保持に関するルールにおいて、歩数制限がなくなり、時間制限のみとなったことから、GKによる時間の浪費がますますできなくなり、プレーのス

ピーディー化が求められるようになった。本調査は、世界のトップレベルのGKがルール改正後、どのようにゲーム中、対応しているのかを把握することで、今後のGKに求められるプレーや育成に関する一助になると考えた。

GKがボールを手で保持してからパスするまでの頻度は全部で470回あり、キックとスローイングで分けるとキックが246回でスローイングが224回であった。

この結果より、特にスローイングの頻度がキックとほぼ同頻度あり、全パスの半分を占めていたことは、GKが味方選手に確実にパスし、ビルトアップしていこうとする意図がみられる。このことはスローイングの成功数が全体の98%であったことから推測できる。清ら⁹⁾は、スローイングは速いタイミングで近い地域に出していて、成功率も高いという調査結果を出している。そして本調査でも同様な結果が得られたと思われる。

したがって、GKはボールを保持した瞬間にスローイングを用いてフリーな味方選手にパスするチャンスがあれば、素早くパスし自分達の攻撃へと確実につなげるようにすることが、守備から攻撃へと切り替える重要な要素であると考えられる。

図3より、パスまでのボール保持時間では、全パスの平均が4.0秒であった。このことから、多くのGKが6.0秒という時間を意識してプレーをしていたことが示された。さらに、キックとスローイングを比較したところ、スローイングはキックより統計的にも有意に保持時間が短いという結果が示された。つまり、スローイングはキックに比べ、ボールを保持してから時間をかけずに素早くパスできるといえる。

図5より1秒毎のパスの頻度をみても、スローイングが2.1秒～3.0秒の間のパスが一番多かったのに対し、キックは6.1秒～のパスが一番多かったことから、スローイングによるパスがキックに比べ素早く行なわれていることがわかる。本調査で、スローイングの成功数が非常に多かったことから、スローイングはボールを保持してから時間をかけずに素早くパスすることが大切であると考えられる。坂下⁸⁾も、キックするよりもその

まま投げることで、攻撃への切り替えに要する時間を短縮できる。すなわちスローイングは、守備から攻撃へ最も速く移行するパス方法であり、逆襲、速攻につながる、と述べているように、スローイングを多用することが確実なビルトアップを可能とし、効果的な攻撃ができると考えられる。

逆にキックはスローイングと同頻度のパスが行なわれているが成功、失敗でみると失敗数が非常に多い。最前線の味方選手にパスするためや陣地を挽回する手段としてキックは有効な手段となるが、確実なビルトアップにつなげられる可能性は低くなる。

スローイングから効果的な攻撃を仕掛けるためには、パスを受ける味方選手が相手選手のマークを受けていない間にパスをすることが大切であり、そこにはボールを保持してからパスに移るときの状況判断の速さが求められる。確実にビルトアップができるからといって、相手選手にマークされている味方選手にパスすれば、自陣ゴール付近でボールを奪われる可能性を高めピンチを招くことになるので、そのような場合はキックで前線にいる味方選手にパスする方が適しているであろう。

周知の通り、GKはペナルティエリアの中なら唯一手を使ってプレーできる特殊な選手である³⁾¹¹⁾¹²⁾そのため、パスの手段がキックのみになってしまうことは、GKのプレー範囲を狭めるとともに、自分達の攻撃へとつなげる可能性を低下させることにも影響すると考えられる。

したがって、GKは常にスローイングとキック両方の選択肢を持つことが重要である。

また、ルール改正により、6秒以内であればペナルティエリア内をどこにでも移動できるようになったことで、ボールをキャッチした後、そのままボールを持って走り、パスを出しやすいところへ移動してからパスすることが可能となった。この場合、多くはペナルティエリアの最前線に走ることが考えられる。たしかに、キャッチした場所が混戦状態で、その場から抜け出した方がパスしやすい場合もあるが、ボールをキャッチした後に、まずペナルティエリアの最前線まで移動して

おけという思考でプレーしては、もっと早くにパスできるチャンスを逃してしまうことにもなりかねないし、ボールを持って走るにしても、どこに走るかを考えてプレーすることが大切である。

つまり、ボールをキャッチした後、ペナルティエリアの最前線にボールを持って移動することが大切なのではなく、より効果的な攻撃を開始できる手段を早く判断することが大切である。

以上のことから、今後の優秀な GK の一要素として、ボールを手で保持してからパスへと移行する際の高い状況判断能力を養っていくことが必要であると考えられる。ボールを保持した瞬間にパスできるフリーな選手がどこにいるのか。スローイングで確実につなぎ、攻撃へのビルトアップができるのか。キックによって前線に蹴りこんだほうがよいのか。6秒間の中であらゆる選択肢を持ち、素早く決断し実行できる能力を養うことが大切となってくる。

指導者はトレーニングあるいはゲームの中で、常に考えたプレーを GK に意識させる指導をすることが大切である。いつも、ボールを取ったら全て蹴っていればよい、または投げればよいという状況判断を伴わないプレーはさせるべきではない。実践形式のトレーニングの中で、GK のプレーによって守備から攻撃へ切り替わる場面が多く出現するトレーニングを行っていく必要がある。例えば、あらゆる距離や方角の目標地点を設定し、コーチが蹴ったボールをキャッチしてすぐにスローイングやキックでパスする技術トレーニングや、ボールの保持時間を設定し、守備から攻撃への切り替えを早くさせるミニゲーム形式のトレーニングなどで、GK に素早いビルトアップを意識させることが必要であろう。

常に変化するあらゆる状況の中から最適な判断を素早く行ない、フィールドプレーヤーも含めてチーム全体が、守備から攻撃へとスムーズに切り替えることによって、より効果的な攻撃の第一歩とすることができ、それがチームの勝利を左右する一要素となってくる。

〔V〕 結 論

ルール改正後における GK のプレーを分析調査した結果、以下の知見が得られた。

- 1) ボールを手で保持してからパスする手段はキック、スローイングともほぼ同頻度あり、特にスローイングを用いて味方選手に確実にパスし、攻撃のビルトアップをしていこうとする意図がみられた。
- 2) ボールを手で保持してからパスするまでのボール保持時間は、ほとんどの GK が6秒間という時間を意識したなかでパスが行なわれていたと思われる。さらに、スローイングの方がキックよりも統計的に有意に保持時間が短かった。

以上の結果から、今後の GK 育成における指導として、ボールを保持した瞬間に、どこへ、誰に、どんなボールをパスすればいいのかという状況判断能力の向上がさらに求められると考えられる。

そのために、GK から攻守が切り替わる場面を多く出現させた実践形式によるトレーニングを多く行なうことが重要である。

参考・引用文献

- 1) FIFA ワールドカップフランス98テクニカルレポート、(財)日本サッカー協会、(1998)
- 2) 堀口正弘：サッカーゴールキーパーのボール処理—ワールドカップイタリア'90—、東京経済大学人文自然科学論集、96、139-164、(1994)
- 3) 日産 F.C. 横浜マリノス編著：サッカー戦術編、194-195、池田書店、(1994)
- 4) サッカー競技規則と審判への指針 1985、(財)日本サッカー協会、(1985)
- 5) サッカー競技規則と審判への指針 質問と解答 1992、(財)日本サッカー協会、(1992)
- 6) サッカー競技規則1999/2000、(財)日本サッカー協会、(1999)
- 7) サッカー・フットサル競技規則2000、(財)日本サッカー協会、(2000)
- 8) 坂下博之：サッカーゲーム中のゴールキーパーの

攻撃プレーに関する研究, 亜細亜大学教養部紀要, 49, 93-122, (1994)

- 9) 清剛裕, 難波邦雄, 増田規, 原田知明: サッカーにおけるゴールキーパーのフィールドに関する一考察, 第6回サッカー医・科学研究報告, 21-30, (1986)
- 10) 末永 尚, 久保田洋一, 吉村雅文, 小塚昭仁, 長谷川望, 古賀初, 石崎聡之, 竹内久善, 越山賢一: Goalkeeping Distribution Analysis, 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 5, 140-147, (2001)
- 11) 鈴木滋, 戸苅晴彦, 掛水隆, 木幡日出男, 河合一武: ゴールキーパー指導の実態調査, 第5回サッ

カー医・科学研究報告書, 1-6, (1985)

- 12) 多和健雄, 長沼健, 永嶋正俊, 長池実, 鈴木嘉三, 畑山正編著: サッカーのコーチング, 276-290, 大修館書店, (1974)
- 13) 山中邦生: サッカーゲームにおけるチーム戦術(戦法)とシステム—1992-1993日本代表チームのゲーム分析から—, 体育の科学, 44, (7), 534-544, (1994)

(平成13年12月6日 受付)
(平成14年3月14日 受理)